ポスターNo.A4　　**実践発表**

在籍学級と国際教室の協働でつくった「べっぷばんぱく」
―子どもたちの「知る・調べる・つくる・伝える」活動を通した小学１年生活科１８時間の実践―

立山 愛（別府市教育委員会　日本語指導員）

1．実践の背景と学習構想

本実践は、大分県別府市の公立小学校 1 年生 33 名を対象に実施した。学級にはスリランカ、オーストラリア、バングラデシュ、パキスタン、ベトナム、フィリピンにルーツを持つ多言語・多文化の子ども 8 名が在籍していた。日常の学校生活では、多言語・多文化の子どもは、「教えてもらう側」「支援される側」として位置付けられやすい状況もみられる。そこで、本実践では、在籍学級担任と国際教室担当が協働し、子どもたち一人一人がもつ言語的・文化的背景や生活経験を学びの資源として生かした生活科の学習として「べっぷばんぱく」を実施した。「知る・調べる・つくる・伝える」という一連の活動を通して、子どもたちが互いの文化に関心をもち、多様な背景をもつ子どもたちと共に学び合う学習過程の構築を目指した。

本実践では、OECD（2019）が示すエージェンシーの視点「他者との関わりの中で、自ら学びに参加し、周囲に働きかけながら学びをつくり出していく力」を踏まえ、子どもたちが強みを生かして学習に参画できる環境づくりを重視した。また、ことばの学びをアイデンティティと社会参加の中で形成されるものと捉えるノートン（2023）の視点から、子どもたちの文化的背景や家庭とのつながりを学習に生かしながら対話を通したことばの学びを重視して学習を展開した。

２．実践の概要

本実践は、生活科の単元として、表 1 の流れで実施した。

表 1　「べっぷばんぱく」の学習の流れ（全 18 時間）

段階	時数	学習活動	具体的な内容
知る①	1 時間	万博との出会い	担任の教師が大阪・関西万博を訪れた経験を紹介し、クラスにもさまざまな国につながる友だちがいることに目を向け、自分たちのばんぱくを作りたいという思いにつながった。
知る②	3 時間	保護者によるプレゼンテーション	保護者がスライドや実物資料を用いて、自身につながりのある国について紹介し、実際に見たり触れたりしながら理解を深めた。
調べる	3 時間	振り返り 調べ学習	「もっと知りたい」と思ったことを出し合い、写真や資料を見ながら調べた。知ったことや感じたことを、どう伝えるか話し合った。
つくる	7 時間	パビリオンの構想・制作	調べたことから、作りたい展示物や体験コーナーを考え、制作し、来場者を意識しながら準備を進めた。リハーサルをして改善した。
伝える	3 時間	べっぷばんぱく 開催	他学年や幼稚園児、保護者を招き、パビリオンを公開した。子どもたちは説明や案内を行い、学んだことを伝えた。
まとめ	1 時間	学習の振り返り	活動を通して知ったことや感じたことを振り返り、紹介してくれた保護者へお礼のカードを書いた。

３．子どもの参加の姿と考察

本実践では、授業記録、児童の振り返り、成果物をもとに検討を行った。保護者による文化紹介では、子どもたちから「この飾りはどんな意味があるの」「その服はどうやって着るの」など次々に質問が出され、「もっと知りたい」という思いが調べ学習へとつながった。

パビリオン制作の場面では、多言語・多文化の子どもたちが家族や文化について語り、それをもとに学級全体で展示内容や体験活動を構想する様子が見られた。周囲の子どもたちも「〇〇さんに聞いてみよう」「もっと教えて」と積極的に関わりながら活動を進めており、一人一人の文化的・言語的資源を共有し、生かし合う学習共同体が形成されていた。

普段は学習への参加意欲が低い傾向にあったオーストラリアにルーツをもつ児童が、友達を先導しながらグレートバリアリーフの制作を進める姿が見られた。制作活動では、自らの知識や経験を生かして仲間に働きかけ、活動を支える役割を果たしていた。ベトナムにルーツをもつ児童は、活動前は「ベトナム語を話すのは恥ずかしい」と話していた。しかし、母親による文化紹介が好意的に受け止められると、その後は来場者への説明にも積極的に参加していた。自身の言語や文化が認められる経験を通して、学びの発信者としての姿が見られた。また、パキスタンにルーツをもつ児童は、家族とともに民族衣装を着て文化紹介を行った。紹介後、友達から「着てみたい」という声が上がると、自ら民族衣装を体験できるコーナーを提案し、準備や説明にも主体的に関わった。紹介するだけでなく、友達が実際に体験できる活動へと発展させた姿からは、学びの受け手ではなく、学びを創り出す存在として周囲に働きかける様子がうかがえた。

活動後の振り返りでは、多言語・多文化の子どもたちから「またやりたい」、周囲の子どもたちからは「もっといろいろな国のことを知りたい」といった記述が多く見られた。これは、本実践が文化理解の機会にとどまらず､子どもたちの学びへの主体的な参加を促したことを示している。また、スリランカにルーツをもつ保護者からは、子どものルーツや文化が学級の学びの中で大切に扱われたことへの喜びが語られた。こうした保護者の声からも、本実践が学校と家庭をつなぐ機会になったことがうかがえる。さらに、活動後の運動会では、万博で紹介した国々のあいさつを全校に向けて発表し、テーマソングを用いた入場行進が行われるなど、実践で生まれた学びが学級を越えて学校全体へと広がった。

これらの姿から、多言語・多文化の子どもたちは、自らの文化的・言語的資源を生かしながら学びの担い手として参加し、学級の子どもたちも互いの文化を学びの資源として活用していたことがうかがえた。また、保護者の参加は、子どものアイデンティティ形成を支えるとともに、家庭と学校をつなぐ関係づくりにも寄与した。

一方で、一人ひとりの参加やことばの変容を記録・評価する方法や、多様な日本語力・学習経験をもつ子どもの参加を保障する工夫については、今後さらに検討が必要である。

【引用文献】

OECD (2019)『OECD Learning Compass 2030: A Series of Concept Notes』OECD Publishing.
Norton, B. (2023)『アイデンティティと言語学習』明石書店.